

おいしいみかんを守りたい

千葉県千葉市立検見川小学校 五年 藤原 朱里

毎年ぼくの家にはみかんがたくさん送られてくる。形はいびつで、汚れていて、茶色くなつたところもあり、うす皮がかたいものもあるけれど、甘くておいしいみかんだ。このみかんはぼくのお母さんのいとこが育てたみかんだ。

ぼくのひいおじいちゃんはみかん農家だった。おじさんが後を継いだけれど、おじさんが死んでしまつて、ぼくのお母さんのいとこが、仕事が休みの日だけ、残つたみかんの木の世話をしている。あまり世話ができないので、このみかんは色や形がよくならなくて、お店に売ることはできないそうだ。いまでもおいしい実をつけるみかんの木がたくさんあるのに、もったいないと思う。

今回学校でみかんをもらった。甘く、おいしく、そして形も色もきれいなみかんだった。こんなにおいしくてきれいなみかんを育てるのはとても大変だろうと思つた。副読本を読んでもみるとみかんを作るには、たくさんの方があつて、とても手間のかかる作業だということが分かつた。お母さんのいとこが一人でみかん農家を続けられなくて、やめてしまったのも仕方がないかもしれない。だから、ひいおじいちゃんのみかんを、またたくさんの人に食べてもらえるようにすることは、もう難しいのだからなと思う。

今はあとを継ぐ人がいなくて、やめてしまふ農家も多いそうだ。一度やめてしまった田んぼや畑を、また元通り作物を作れるようにするのは大変だろう。みかんだけではなく、おいしい日本の農作物を守っていくために、農家を守っていくために、何かできることがないか、みんなで考えていかなければならないと思う。